

名古屋柳城短期大学  
第2回東日本大震災復興支援  
ボランティア活動報告書  
2012年8月30日～9月2日



日本聖公会東日本大震災被災者支援

## 目 次

犠牲者を悼み	1
第2回東日本大震災復興支援ボランティア活動について	3
活動概要	
プログラム	4
活動場所	5
写真で綴る四日間・私たちが見た被災地	6
参加者の感想	10
あとがきにかえて	36

### 種蒔き

マーガレット・ヤング

翼ひろげた天使が  
愛と心理と光明との  
種子をひと粒手に持って  
飛ぶのを止めて考えた。  
「これが大きくなつたなら、  
すばらしい実がなるように、  
どこへ蒔いたらよいのだろう」  
救い主さま、それを聞いて、  
にっこりわらつておっしゃった。  
「私のために その種子を  
子ども心に蒔いておくれ」



**犠牲者を悼み、復興の早やかなことを祈りましょう**  
**—ボランティア活動を受け入れて下さった方々に感謝しつつ—**

学長 新海 英行

3. 11の東日本大震災（原発事故による災害を含む）から1年19ヶ月余が経過しました。とはいえ、死者1万5,870人、行方不明者2,813人、そしていまだに避難先に留まっている人が1万1,406人です（2012年3月現在）。大災害の残した爪跡はいつこうに癒えていません。実は、私も昨年と今年、被災地を訪れ、その惨状を目前にして言葉もありませんでした。尊い命を失われた多くの方々の無念の思いが痛いほど伝わってきました。家族や家や仕事を奪われた方々の生きることへの絶望の思いも重く受けとめました。それだけに、そうした無念と絶望の思いにどう応えていったらいいのか、何をすべきか、私でできることがあるだろうか、など逡巡することも少なくありませんでした。そこで打開してくれそうなのがボランティア活動ではないだろうか、と考えるようになりました。各自それぞれ違いはあれ、自分なりにこんなことならできる、あんなことに挑んでみようか、などと試行錯誤しつつも自分発見し、さらに進んで自らの生き方が探求できる格好のチャンスとなりうるかもしれません。ボランティア活動がいかに有意義か、その理由はここにあると思われます。

さて、昨年につづいて今年も、8月30日から9月2日まで本学の学生たちと教職員が東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加し、被災地の様子を身近で見聞し、現地の幼稚園で子どもたちと親しくふれあい、一緒に学び、そしてともに祈るなど、貴重な体験することができました。新聞やテレビで間接的に知ることもむろん大切なことですが、自分の目と耳でより直接的にまた、体験的に現実を知り、そしてフェイス・ツー・フェイスで子どもたちと語りあい、ふれあうことこそ、被災地の方々の立場、とりわけ子どもたちの立場に立って何をすべきかがいっそう鮮明に見えてくるもっとも濃厚な学びではないでしょうか。その意味で、報告会（10月17日）では、昨年と同様に、ボランティア活動に参加したみなさんの体験談を非常に興味深く聞かせていただきました。そして、私自身、体験談からたくさんことを学ぶことができました。これらの体験談が談に終わらず、文章化され、記録集としてまとめられたのが本誌です。私たちもこれから本誌を精読し、参加したみなさんの体験からあらためて学び直したいと思います。さらに書かれていることをめぐってぜひ話しあいもしたいし、学びをもっと深め、発展したいものです。そう考えると、本誌は、ただの感想文集ではなく、学びあいのためのテキストのものなるはずで、今後、本誌が有効に活用されることを願うばかりです。

あらためて被災地のことを思いますと、復興どころか復旧のめどが立っていない地域がすくなく残っています。ボランティア活動に過剰な期待をかけることはできませんが、これからもっと多くの方々が活動にかかわることによって被災された人びとと文字どおり

「いっしょに歩く」人びとの輪（絆）が大きく広がっていくことが期待されます。そういう広がりの中で、犠牲者を悼み、復興の一日も早やからんことを共に祈りましょう。

末尾ではありますが、お世話になった各施設と先生方にお礼を申し上げます。日本聖公会「いっしょに歩こう」プロジェクト本部の池住 圭先生はじめスタッフの皆様、ふじ幼稚園、若松聖愛幼稚園、新地ベース、磯山聖ヨハネ教会、まちの工房まどかの諸先生にはご多用の中大変懇切丁寧なご指導をいただきまして、ほんとうにありがとうございました。下原大介先生（前チャプレン）にもご無理をお願いし、貴重なご指導をいただきました。感謝申し上げます。さらに、そもそもボランティア活動の企画からはじまり、報告会、そして本誌の編集にいたるまでご指導・ご尽力くださった尾上明子先生（委員長）はじめ宗教委員会の教職員に心より感謝を申し上げます。

最後に、今後この2年の取組が本学のボランティア活動の広がりや深まりをもたらし、はたまた建学の精神を社会的にいっそう具体化する有意義な働きに発展していくことを念願してやみません。



## 第2回 東日本大震災復興支援ボランティア活動について

キリスト教センター

尾上 明子

第2回目のボランティア活動は、第1回に参加した学生たちの切なる願いで実現したといっても過言ではありません。昨年の創立記念礼拝の第2部で行なわれた報告会で第1回の参加者全員は、忙しい柳城生活のなか何度も集まり、自分たちの見聞と深く心に残った想いを発表しました。会場の学生・教職員は学生たちの涙ながらの発表に深く心を動かされたのでした。第2回目の今年、その学生たちの熱い想いの後押しによって、昨年にも増して実り多い活動を行なうことができました。これも、学校はじめ、日本聖公会「いっしょに歩こう！プロジェクト」本部の方々、現地の皆さまのご支援とご協力の賜物と心から感謝申し上げます。

今回のボランティア活動募集も、学生たちの関心は高く、すぐに定員をオーバーする勢いでした。昨年参加した学生のなかには、もう一度と申し込んだ学生もいましたが、涙を呑んで辞退していただきました。期間は、8月30日（木）～9月2日（日）の3泊4日。学生13名、スタッフ5名（下原元チャプレン、尾上、菊地、高瀬、水落各教員）の体制で精一杯、元気に明るく楽しく柳城力を発揮してきました。今年の訪問先は、昨年度と同じ訪問箇所は1箇所のみ（「ふじ幼稚園」）で、津波で流され消失してしまった「まどか荒浜」の新施設「まちの工房まどか」、「若松聖愛幼稚園」、「いっしょに歩こう！プロジェクト」新地ベース、仮設住宅訪問、磯山聖ヨハネ教会と新しく繋がりを持つことが出来たことは、活動をより広げる結果となりました。どこに、行かせていただいても、温かく歓迎をしていただき、感謝に絶えません。学生共々、被災地に立ち、そこでの生の声を聞かせていただいたことは、何にも代えがたい経験です。私自身、「身体全体で受けとめ」更にまた、この経験を通して「魂の深みに語りかけてくる声に耳を傾けること」の大切さを今回も更に強く感じさせていただきました。十字架上の主イエスが、最後に「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになられるのですか？」(マタイ 27:46)と叫ばれたあの叫びは、被災地の方々の悲痛な想いと似ています。人間には、理解しがたいこの大きな試練をどのように受けとめていくのか、唯ただ、天を仰いでいくことしかできません。直接被害のない私たちは、何をすべきなのか、これからも問い続けていきたいと思えます。

さて今日、この大きな出来事がすでに風化しつつある感があります。現地のスタッフの方々は、その温度差をひしひしと感じておられます。本学のこの取り組みが一部に留まることのないように、祈りとともにその輪が広がり行動に移していくことができますように切に願い祈ります。この冊子があるためにも有効なものとして用いることができたら幸いです。

「いっしょに歩こう!プロジェクト」

東日本大震災復興支援ボランティア活動

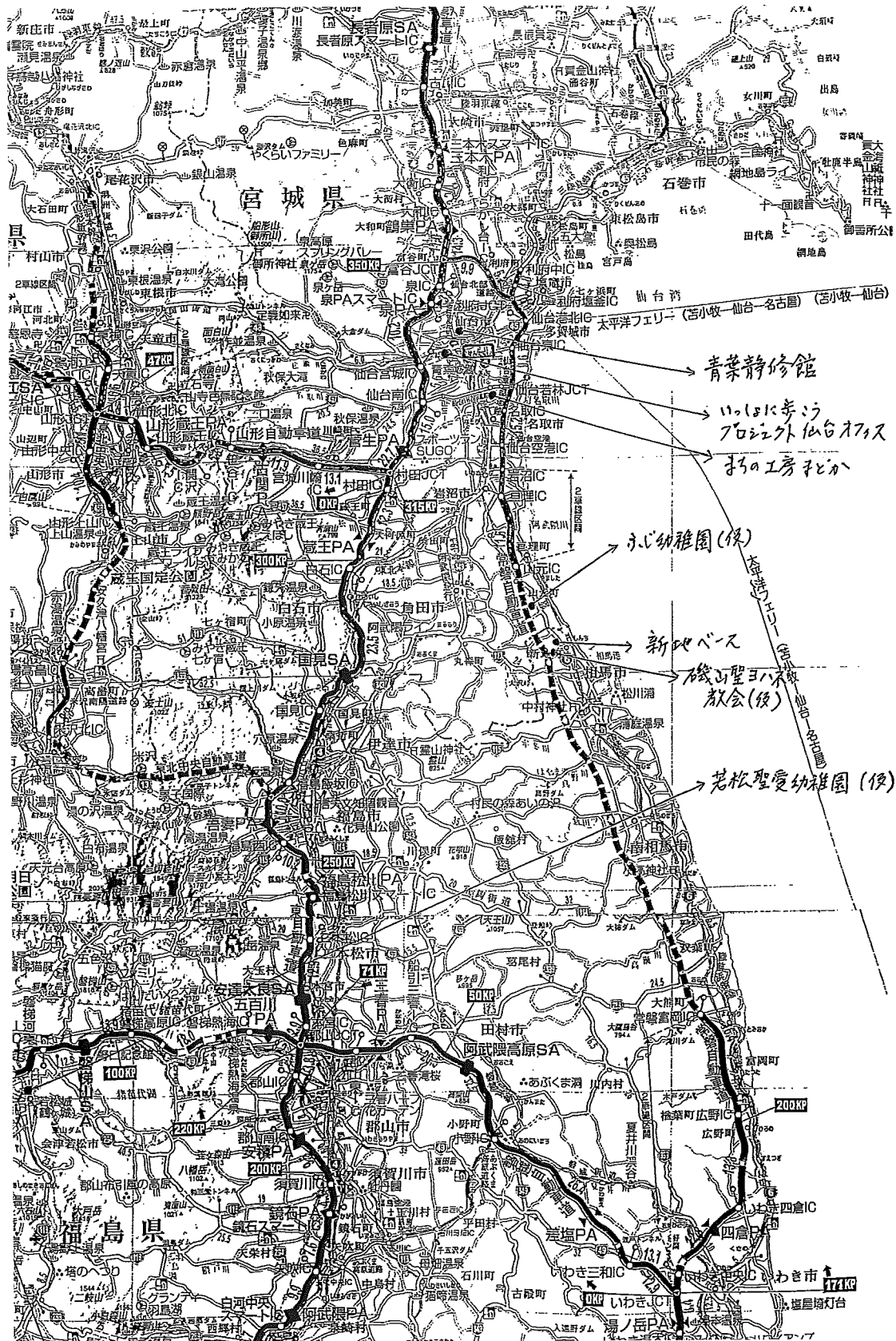
日程：2012年8月30日(木)～9月2日(日) 3泊4日

東日本大震災 復興支援ボランティア 2012

名古屋柳城短期大学

	8月30日(木)	8月31日(金)		9月1日(土)	9月2日(日)	
	まちの工房まどかプロジェクト事務局	ふじ幼稚園	若松聖愛幼稚園	新地ベース	磯山聖ヨハネ教会	
7:00		朝食		朝食	朝食	7:00
8:00		ふじ幼稚園へ移動	若松聖愛幼稚園へ移動		帰宅準備	8:00
9:00	840 集合(昼食持参) 【名古屋駅銀の時計】 903 名古屋発 のぞみ214	【保育補助】		新地ベースへ移動	磯山聖ヨハネ教会へ移動	9:00
10:00				【仮設住宅訪問】		10:00
11:00	1043 東京駅着 1056 東京駅発 こまち23		【保育補助】		【主日礼拝】	11:00
12:00	昼食(車中)				【交流会】	12:00
13:00	1237 仙台着 トヨタレンタカー手続き まちの工房まどかへ移動				仙台駅へ移動	13:00
14:00	【訪問・交流】				(ガソリン給油)	14:00
15:00			青葉静修館へ移動		トヨタレンタカー手続き 駅周辺で自由時間 (夕食買出し)	15:00
16:00	「いっしょに歩こう」 事務局へ移動 【オリエンテーション】	青葉静修館へ移動		青葉静修館へ移動		16:00
17:00	青葉静修館へ移動 (夕食・朝食買出し)	(夕食・朝食買出し)	(夕食・朝食買出し)	(夕食・朝食買出し)	1626 仙台発 こまち30	17:00
18:00					1808 東京駅着 1820 東京駅発 のぞみ251	18:00
19:00	夕食	夕食	夕食	夕食	夕食(車中)	19:00
20:00				帰宅準備	2001 名古屋着 2010 解散	20:00
21:00	夕べの祈り・黙想	夕べの祈り・黙想	夕べの祈り・黙想	夕べの祈り・黙想		21:00
宿泊	青葉静修館	青葉静修館		青葉静修館		宿泊

活動場所





📷 写真で綴る4日間

# 私たちが見た被災地



「まどか荒浜」跡で



新設「まちの工房まどか」にて



施設長さんのお話を伺う



いっしょに歩こう！プロジェクト！  
仙台オフィス





「ふじ幼稚園」



仮園舎（区民会館）のお別れ会



園長先生のお話を伺う



園バスが流された園舎でお祈り





「若松聖愛幼稚園」仮園舎







磯山聖ヨハネ教会（仮礼拝場所）



いっしょに歩こう！プロジェクト「新地ベース」





## 参加者の感想

東日本大震災から1年半経ちました。8月30日から9月2日まで学校からボランティアとして仙台に行ってきました。私はこのボランティアに参加して、被害の現状だけではなく人を支えることの大切さと、人の温かさを感じました。

仙台駅は名古屋駅とあまり変わらない印象でした。しかし、郊外に近づくにつれて緑が増えていきました。その緑は津波で流された家の土台を覆い隠すように生えていました。それだけ東日本大震災から月日が経ったことを表しています。また、線路も津波によって流されてしまったり、津波によって流れてきた砂に覆われてその上に雑草が生えていました。「ここが駅で線路があったんだよ。」と言われるまでわかりませんでした。新しい線路は今ある所よりも内陸部に土を盛って作る予定と言っていました。線路を中心として再創造し活気あふれる街になってほしいと思いました。そして、施設の屋根に黒松がのってしまうほどの大きな津波の被害を受けた「まちの工房まどか」は新しい土地に移転して地域の人との繋がりを大切にしながら活動をされていました。移転するまでには多くの人の協力と館長さんの努力が見られました。新しい施設は自然の光にあふれていて、窓が多く外からどのような活動をしているか見え

学籍番号：24D07 氏名：大島 結衣

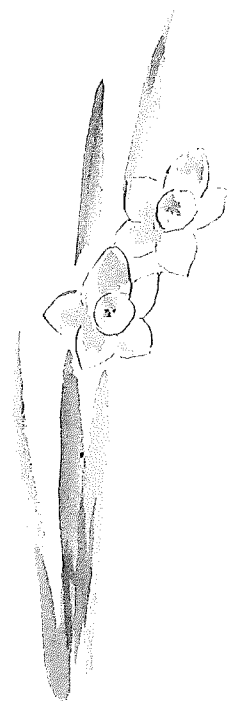
るような仕組みになっていました。また、地域の人の作品を飾る場所などが設けられていて今までの障害者福祉サービス事業所のイメージを覆すもので、地域との繋がりをすごく大切にしていると感じました。

ふじ幼稚園を訪問したのは仮校舎の最後の保育の日でした。「真庭幼稚園ありがとう会」で、みんなでカレーを食べたり、歌を歌ったりしました。園長先生は今まであったことをオブラートに包まずにストレートに子ども達にお話になっていました。こんなにストレートに言っているのかなと思いましたが、「忘れられることが一番怖い」と仙台オフィスの方のお話にあったのを思い出しました。辛い話、悲しい話だからといって子どもに話さず向き合わせなかったら子どもは成長できず、自分の中にその悲しみや苦しみを止めておかなくてはいけなくなります。園長先生がストレートにお話になることによって子ども達は思い出して向き合えるのだと思いました。また、園長先生はありがとう会が始まる前、私たちに今まであったことを丁寧にお話して下さいました。涙が出てしまうほど辛く悲しいお話は私の心に強く響き、今後の保育者になるに向けての意識や思いが芯の通ったものになりました。「命を守る」ということは保育の中で一番大切なことだと学びました。そ

して守った命も心のケアなどしないと子ども達が心の中にある悲しみや苦しみをどうしたらいいか分からずため込んでしまうので、心のケアやカウンセリングが大切だとおっしゃっていました。また、ふじ幼稚園を再開するきっかけとなったのが、公園で保護者の方が集まり幼稚園をやっており、「ふじが戻ったら、ふじに戻る。」といった言葉があったからです。保護者の方の思いと先生方の努力の結果がふじ幼稚園再開に繋がったに違いないと感じました。現在は新しい土地でユニセフから寄贈された園舎で保育をされています。木の温もりが肌で感じることでできる設計になっていました。私たちのボランティアは「いっしょに歩こう！プロジェクト」仙台オフィスの協力の下で活動させて頂きました。「いっしょに歩こう！プロジェクト」は日本全体で支えよう！する・されるではなくいっしょに歩く！という意味が込められています。仮設住宅に行きたくても行けない人のところへ出向いてその人のニーズに合わせて支援をされているとききました。また、新地ベースで活動されている松本さんはタイムリーにレスポンスすることが大切だとおっしゃっていました。季節などに応じてその時に必要なものを必要にしている人に届けることは利用者さんにとっても支援する側にとっても大切で幸せなことだと思います。松本さんは仮設住宅を訪問した際、利用者さ

んとコミュニケーションをとり、どんな物が欲しいかなど聞いている姿が印象的でした。

ニュースでは復興・復旧などと言われていますが、このボランティアに参加して再創造という言葉を知りました。「いっしょに歩こう！プロジェクト」は来年の5月30日までで終了してしまいます。「地元でやれることを地元に残す予定」と仙台オフィスの人がおっしゃっていました。私たちの活動も終わることなく、これからもずっと一緒に歩いていきたいと思いました。



8月30日-9月2日に仙台へのボランティアに参加しました。この4日間では感じることや考えさせられることが沢山ありました。

仙台に着いてから、津波の被害のあった場所へ案内して頂きました。そこにはまだ建物が壊れているままの状態の建物が残っていて、かなりの衝撃を受けました。普段、テレビや写真で見ていた現地の様子、実際に目にすると言葉を失ってしまいます。また、違う日には海の近くに行き、現状を見てきました。住宅街だったというその地には家が建っていた跡があるだけで、綺麗に何もなくなっています。1年半経っているので、取り壊しの作業も進んでいるそうです。海から少し離れた新地では、「ここからは本当は住宅で海は見えなかった」という話を聞き驚きました。海が見えるその景色からは想像できませんでした。また、津波の被害にあった公民館、ギリギリ波は届かなくて避難場所になった教会などを訪れて、実際にそこから住宅街だった土地を見下ろしてみると、恐ろしくなりました。確かに海は近いのですが、その穏やかそうに見える波が家や人、車を呑み込んだとは考えられないのです。

その津波で11人の子どもと1人の先生を亡くしたふじ幼稚園にも訪ねました。元気

な子どもたちが沢山出迎えてくれ、園長先生からは直接、被害に合った日の話を聞きました。実際、自分の背を遥かに上回る波を目の前で見たとき、冷静に行動することは難しいと思います。それでも亡くなった順子先生は最後まで子どもたちを助けようとしていました。本当に偉大な方です。その辛い状況があったふじ幼稚園ですが、子どもたちの様子からは嘘だと言いたいくらい楽しそうに遊んで過ごしていました。その日はちょうど仮園舎で過ごす最後の日で、ありがたいの会をしていました。子どもたちがロッカーや教室、壁、全てにありがとう、とお別れをしており、その一人ひとりの優しい気持ちがこちらにも伝わってきました。子どもたちだけでなく、先生方も元気で明るく、そして強い方ばかりです。私もこのような保育者になりたいと感じました。今では新しい園舎も造られて、新しい生活を送っています。順子先生と11人のともだちも、きっと見守ってくれていると思います。

また、まちの工房まどか（障害福祉サービス事業所）や仮設住宅、教会などにも訪問させて頂きました。当時や今現在の話を聞いたり、子どもからお年寄りの方と触れ合ったり、教会では礼拝にも参加させて頂きました。被災地では人々が支え合い



ながら生活を送っています。そこには人を  
気遣う気持ちや思いやり、温かさであふれ  
ています。一緒に歩こうプロジェクトの方  
のサポートのお蔭で、沢山のの人々と出会う  
事ができ、視野が広がりました。貴重な経  
験をさせて頂けて本当に感謝しています。  
微力ではありましたが、現地の方の「あり  
がとう」という言葉と笑顔をもらえて私た  
ちは言葉に表しきれない想いで沢山です。  
このボランティア活動は自分なりに成長で  
きた4日間で、私に大きな影響を与えてく  
れました。

震災の影響で、遺族を亡くした方、連絡  
を取れない方、家を流されたり今まで通り  
に暮らす事が出来ない方が沢山います。私  
たちが普段何気なく過ごしていると、こう  
いった現実を忘れてしまいがちです。被災  
地から離れた場所にいる私たちに何ができ  
るのか、再度考えていきたいです。



名古屋柳城短期大学から東北、主に仙台と福島に3泊4日でボランティアに行きました。東北は、テレビや、事前に勉強したこともあったので少しはどんな現状なのかはわかっているつもりでした。

しかし、いざ現地に足を踏み入ると本当に悲惨な現状が目の前には広がっていました。テレビでみたことのある風景だったが、やはり、メディアなどを通して見るのとは違ってとても心苦しくなる景色でした。最初に行った「まちの工房まどか」へ行く道のりだけでも当時起こった出来事や、人々の動きなどを聞き、とても苦しい気持ちになった。ガソリンスタンドの屋根はぐしゃぐしゃになっているし、民家は土台部分だけしか残っていなかった。これらの被害が全部地震と津波によるものだと思うと本当に恐ろしいことがあったのだと実感しました。それらは、仙台の中心部から少ししか離れていない場所だったのに少し離れているだけでこんなにも違うのかと思いました。

一緒に歩こうプロジェクトの仙台オフィスにいったときには、今までのボランティアに関する経緯などの報告を聞かせていただきました。そこではメディアで知ることのできないことが多々聞くことができました。私たちがテレビでみていた家や車など

が流れている映像のほかにも、「本当はその中にも人が流されていたんだよ。」という言葉も聞いた時にはとてもショックを受けました。

しかし今では現地の皆さんは立ち上がり職を探したり元気に生活をできるように頑張っているということを知れて少し安心しました。1日目は地震からの出来事のおおよそのことを知る1日となりました。

2日目はふじ幼稚園と若松聖愛幼稚園グループに分かれてボランティアに行きました。ふじ幼稚園でジュンコ先生7人の園児のお話を聞いて本当につらいことがあったのだと思った。”お葬式ごっこ”を子どもたちがしていたと聞いたときは衝撃的でした。私が子どものお葬式ごっこなんてしたことにはなく、想像もつきません。しかし、時間がたつにつれて”お医者さんごっこ”や”自衛隊ごっこ”をするようになったと聞いて少し安心しました。

そしてふじ幼稚園のさよならの会に参加させてもらい、本当の幼稚園の先生をみじかに見れ、とても勉強になりました。

しかし、ふじ幼稚園の園児たちを見ると私たちはボランティアに行ったはずなのに、実習に行く感覚で各園で活動をしてしまっていたことが、今でも心残りです。しかし、この事実気づいたのは、チャプ

レンが、夜の反省会の時にそうやって伝えてくれたから気づくことができました。もし、実習だと思わずにふじ幼稚園の子ども達と”楽しんで交流する”ことだけに集中できていたらもっと違うことも見えてきたのではないかと思いました。しかし、チャブレンがそうやって私たちに教えてくれて気づくことができたので、このことを次につなげていこうと思えました。

3 日目は新地へ行って、一緒に歩こうプロジェクトのスタッフの松本さんと行動を共にしました。1時間ほど新地で当時のボランティアの内容を聞いて、荒さんという現地で被災された方にリアルなお話を聞かしてもらいました。新地は、直接海に面していたため、本当に被害が激しかった。特にとても近くで被災した場所を見ることで本当にこの地で人々が暮らしていたのだと改めて実感した。そして、仮設住宅に行ったときには現地の人々が温かく迎えてくれました。

4 日目はまた新地へ行き、教会で礼拝に参加しました。そこでは、私自身の気持ちを整理する時間としてボランティアで体験したこと見てきたこと感じたことを、整理できました。

このボランティアは、私にとって本当に貴重な4日間となり、私の夢である保育士になるための心意気も新たになったし、何よりも真面目になっていろいろなことを適

当にしないで何事にも後悔しないように全力で取り組もうと強く思いました。このボランティアに参加できて本当によかったです。





4 日間、ボランティアで仙台に行くことができました。現地を見たり、現地の人の話を聞いていろんなことがわかりました。

仙台駅に着いたときは、愛知県とそれほど変わらず、ほんとにここでは地震が起きたのかと、不思議でした。そのあと、郊外に行くにつれて、ぐちゃぐちゃになっていたガソリンスタンドや、たくさんあったはずの防風林、津波によって削られた家などを見て、ようやく、この地震の悲惨さがわかってきました。海岸沿いは、瓦礫を積んだトラックがたくさん走っていて、なかなか減らない瓦礫の撤去作業を、毎日毎日と日々の繰り返して、とても大変な作業をしているのを実感しました。

幼稚園では、子どもたちとふれあう中で辛い思いをしてきたとは感じさせないような明るい顔をしており、驚きました。お昼ご飯をいっしょに食べた時にいろいろお話しして聞いたりすることができました。そのあと、園長先生から当時のお話を聞きました。地震で園が崩れていたけれど、保育は何とかできるような状況だったので、保育活動していたけれど、子どもたちの安全を考えると、このままこの園で活動するのは、危険となり、この園を閉じるのか、再建するかで、とても悩んだと聞きました。周りの人からの助けもあり、現在は再建した建

物で、保育をしているが、もとあった園の場所に新しく建て直す計画を進行中だそうです。設計図は見してもらったけれど、実際の建物は見る事ができていないので、完成してから、また、見に行きたいなと思いました。

それから、松本さんに沿岸沿いを案内していただきました。隣の家の方が、高い場所に家が建っているのに、低い場所に建っている家のほうが、被害が少なかったりと、高い場所低い場所関係なく、周りの環境で被害の大きさが変わっていました。右と左とで、景色が違っていたりと、ほんの少しの距離で被害の大きさが違っていました。他にも、礼拝を行うことはできないが、無事崩れずに残った教会を見せていただきました。無事建ってはいるけれど、建物は傾いていたり、そのせいで窓が閉めることができなかつたりと、崩れてはいない建物も、それなりの被害を受けていることがわかりました。

このボランティアを通していろんなことを、学ばせていただきました。大きな被害にあっていることは、テレビや新聞などで見て知ってはいたものの、実際に目にしたことはなかったので、この震災の被害がどのくらい酷かったのか、よくわかっていませんでした。私が一番印象に残っている話

は、駐車場に福島ナンバーの周りに車が止まっていなかったりするのに、募金をしてくれたりはしてくれて、目に見えないことをするのが、援助なのかなと疑問に思うと言っていました。募金をするというのも、一つの援助の仕方だと思うけれど、福島産の食べ物を避けて買い物するなどいろいろ矛盾している点があるなと思いました。

今回のボランティアは、4日間という短い期間でプログラムを組まれて行動していたので、私たち何かをするという活動は、あまりできなかったけれど、現地を実際に見たり、現地の人のお話を聞いたりなど、行かなければ知ることのできないことや、ニュースなどで取り上げられていない場所の現状を知ることができて、とてもよい体験をすることができました。この活動で得たものを忘れず、これからの被災地を見守っていきたいと思います。



私は8月30日～9月2日の四日間、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県・仙台市にボランティアに行ってきた。このボランティアは大学側から話があり、被災地の現状を知り、自分も少しでも被災された方の役に立てればなと思い参加したものである。

仙台に向かう新幹線で「元気を届けたい、頑張ってもらいたい」などと思っていた。しかし実際に現地に行ってみると自分が元気をもらったし、自分が頑張らなければと感じた。

仙台初日は、障害福祉サービス事務局長のまの工房まどかに行った。まどかの施設長に震災の被害にあったことを現地で話してもらえた。そこは元まどかがあった場所だった。けれど津波でまっさらな平地になっていた。さらには一年半経ち雑草が生い茂っていた。復興などが進まない中、時間が経ち雑草だけが茂っている地はとても悲しく感じた。新しく建てたまどかはとても素敵だった。ほとんどがガラス張りで見え部屋に仕切りがなく明るく誰でも入れる施設で、建物で福祉とはなんなのかを表現しているようだった。私たちが訪問した時に何人ものお客さんがまどかに来ていて地域に愛されていると感じ心が温まった。まどかを出て「いっしょに歩こう!プロジェクト」の事務局に行き震災の現状や被災者の

気持ちを聞いた。被災者の本当の気持ちを聞いた時は胸がすごく締め付けられた。復興という言葉が好きではない理由が分かり国内でこんな関係になるのは悲しかった。だから愛知県も早めにながれきを受け入れてほしいと思った。

二日目はふじ幼稚園のお手伝いに行った。ふじ幼稚園の事は仙台に行く前に勉強をしていたから、震災で先生と子どもが亡くなったことを知っていた。だから今はどんな感じなのか気になっていた。ふじ幼稚園では借りていた園舎とお別れのため「ありがとうの会」をやっていた。教室に入ると大勢の子ども達が“ともだちになるために”という歌を手話付きで一生懸命、無邪気に歌っていた。皆が大きな口を開けてまるで震災が無かった様に歌っていたので関心したのか、感動したのか、涙が溢れそうになった。わたしは必死にこらえてその子ども達の姿を目に焼き付けた。行く前はどうか元気を届けようとか何したら元気になってくれるかなとかばかり考えていたけど自分がもの凄く元気をもらった。園長先生の話は保育者になりたいと思っている自分には本当に勉強になった。本来あるべき保育者の基本を教えてもらい園長先生自身がその基本であり素晴らしい方だった。どんな時でも命を守ることが基本というのは当然

り前だけど、どこか隅の方に置かれてる事があるため改めて気付き考えさせられた。亡くなった方の事を常に思い忘れず前を向いて今いる子どもを一番に考えている園長先生を尊敬し自分もそんな保育士でありたいと感じた。

三日目は、新地にいき実際被災にあい家族を亡くされたミヨさんから話を聞いた。津波の高さなど口で聞いても想像できなかった。その後被災の酷かった地域をミヨさんと見に行った。そこは草が沢山生えて平地で住宅があったなんて信じられなかった。でも良く見ると土台のコンクリートが残っていたり、曲がったアイロン、ポットなどが落ちていた。テレビでは見ていたが自分の目で見るのとは衝撃の大きさが全然違った。現地に行くとミヨさんはここに何があったとか明るく話してくれていたけど、皆が写真を撮ったりしている時に、遠くの方を見つめてとても悲しそうな寂しそうな表情をしていた。隣にいた私はなんて言葉をかければいいのか分からず私は何もできない…と、ふと辛くなった。けれどミヨちゃんがお別れの時に「すごくパワーをもらったよ!ありがとね!!」ととびきりの笑顔で言ってくれた。初めてボランティアのやり甲斐を見つけれたと思った。

四日目は磯山聖ヨハネ教会で礼拝を行った。柳城生らしい最終日だと思った。歌の披露をした時に一人のおばあさんが涙を流

してくれた。すごく嬉しかったし四日間あつという間でお別れだと思うと寂しかったけど私たちが歌う事で心を動かせたり、感動してくれる人がいると思うとこれからも歌いつづけようと深く思った。

四日間で沢山の事を学び、沢山の事を考えさせられた。一年半が経ち震災のニュースが少なくなる中で、今回貴重な体験をした私たちが身近なところからでもいいから自分の目で見た被災地、被災者の事を伝えなければならぬと感じました。将来保育者なるための一番基本を被災地で学べたことを誇りに思いこれからは活かしていきたいです。



学籍番号：24D32 氏名：中村柚那

東日本大震災復興支援ボランティアに参加し、8月30日 - 9月2日までの4日間、仙台へ行ってきました。

1日目、様々な光景を目にし、町の工房まどかという施設や、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の事務局に訪問し、震災前の様子、震災当日の話や今の現状などの話を聞かせて頂きました。仙台駅に着いた時は、本当にここが震災の被害に遭ったのかなと思うほど、駅の周りはキレイに復興していました。

しかし、車を少し走らせ奥に行けば行くほど、そこにはまだ震災の傷跡が残ったままの建物や瓦礫の山が広がっていました。テレビや新聞を通して見てはいたけれど、実際に生で見た衝撃は大きく、まだ到着したばかりでしたが、その風景は言葉にならないものでした。

2日目、ふじ幼稚園に訪問しました。着いてすぐ園長先生に震災時から今までのお話を詳しく聞かせて頂きました。全ての子どもを救えなかったこと、大事な仲間の先生を亡くしてしまったこと、他にも今に至るまでの様々な思いなどを私たちに話してくださいました。話を聞いて色々感じることや、考えることが出来たし、もし、将来自分がそのような災害に遭遇してもきちんと対応出来るような知識と力をつけていか

なければと思いました。その後、子どもたちと交流し、その日は仮園舎とのお別れの日だったので、園舎やその町の人への「ありがとう会」に参加させていただきました。その時にこの4日間の中で、1番印象に残る出来事がありました。それは、いろんな出し物がある中で、園長先生が震災から今までのこととお話された時のことです。その時に、さっきまで笑顔で遊びまわっていた隣の子が私の手を黙ってギュッと握ってきました。あんなに元気で笑顔な子どもたちでも、あの小さな体で様々な怖かった思いや辛い思いを心のどこかで抱えていると考えると、胸が苦しくなり、それと同時にこの子たちに私たちが出来ることはないのかと深く考えました。そのあとも私たちの発表やお外遊びで交流し、無邪気な逆に子どもたちから元気なパワーをもらい、改めて子どもと関わることはいいなと感じました。また、ふじ幼稚園ではひまわりをととても大切にされていて、私たちがプレゼントしたひまわりのペンダントを先生方や園児みんな喜んでくれ、多くの数を作るのは大変だったけど、本当に頑張って作って良かったと思いました。ふじ幼稚園へ行き感じたことは、怖い・辛い経験をしながらも先生方、園児のみんなが笑顔でいられるのは、お互いを信頼し合い固い絆で結ばれているから



だということです。保育者をしていく上で最も大切なことはどんな時でも園児を信じ、守っていくことだと園長先生の話や先生方と園児との関わりから再確認することができました。

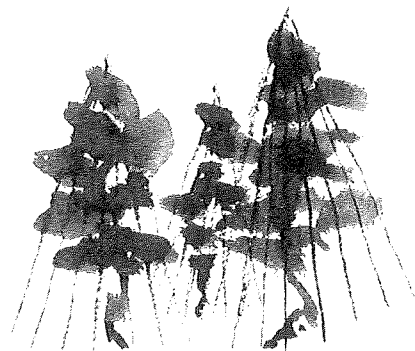
3日目、以前礼拝でもお話して頂いたボランティアをしている松本さんという方と実際被災に遭われた荒さんという方に実際に被害に遭われた場所へ行き、お話を聞かせて頂いたり、旧磯山ヨハネ協会へ行き、お祈りをしました。そこは海の近くで、堤防や道路が割れて崩れていたり、絶対に曲がらないような鉄の柱や柵が針金のようにグニャグニャに曲がっていたり、家があったであろう場所には、地盤だけ残され家の姿形は、跡形もなくなっていました。そんな光景を目にし、津波の恐ろしさを改めて感じました。その後、時間の都合上短い時間でしたが、仮設住宅に訪問し、交流させてもらいました。

4日目、最終日は磯山ヨハネ教会の礼拝に参加させていただきました。4日間という短い期間でしたが、そこで気づいたことや感じたことを思い返したり、亡くなった方や被災に遭われた方、そして今後の復興のためにも聖歌を歌ったりお祈りすることは良い機会となりました。

この4日間を通し、自然の恐ろしさを改めて感じました。そしてなにより、実際に現地へ行って生で現状を見たり、リアルな話

を聞くことでテレビや新聞ではわからなかったことを知れたり、現地へ行ったからこそ、感じる事が出来たり考えることが多くあり、自分自身成長出来たように感じます。この貴重な経験をいつまでも忘れず、そして無駄にしないように、多くの人に伝えていったり、自分に出来ることは限られているかもしれないけど、ここで終わらず継続的に活動し、これからも少しでも力になればと思いました。

このような機会を与えてくれた多くの方へ感謝しています。



今年の8月30 - 9月2日まで被災地ボランティアに参加させていただくことができました。

まず仙台駅に到着して驚いたことがあります。それは、駅前では震災の被害がほとんど見られなかったことです。高層ビルや家電量販店などでにぎわう駅前で昨年に震災があったという事実を信じるできませんでした。しかし車で海の方へ走ること10 - 15分ほどで現実を目の当たりにしました。日ごろメディアを通して見ているがれきの山、柱がグニャリと折れ曲がり、屋根が波によって運ばれてきた防風林のクロマツという松の木により大きく凹んでいるガソリンスタンド、1階部分が大きく削られている民家、家屋は流されてしまったが残ったコンクリートの土台部分、今も修復され続けている道路などを見てしばらくは言葉が出ないほど唖然としていました。

しばらくして「町の工房まどか」に到着しました。ここは、軽度の障がいを持っている方などが働く場です。しかしこの「町の工房まどか」も震災により1度流されてしまい、少し離れた場所での再開だそうです。ここにいる方々は本当に明るい笑顔で私たちを出迎えてくださいました。施設長から聞いた話によると、震災が起き津波が来る前に職員の方が施設の方を1人の死者

を出すことなく避難することができたそうです。

「町の工房まどか」を出て次に向かった場所は「いっしょに歩こう!プロジェクト」の仙台オフィスです。このプロジェクトは前にも記述したように日本聖公会が展開する被災者を支援するボランティア団体です。ここでもお話を聞くことができました。1番印象に残っている言葉は「震災はまだ終わってない」という言葉でした。今、私たちが住んでいる東海地区のテレビや新聞などのメディアではもうほとんど東日本大震災のこと、東北地方のことはあまり取り上げられませんが現地の人々は今もなお苦しんでいるということを改めて教えてくださいました。

2日目は幼稚園で子どもたちとふれあいをすることができました。私が行かせていただいたのは、ふじ幼稚園という幼稚園で地域の公民館を仮園舎としていましたがちょうど新しい園舎に引っ越すことになり公民館とのお別れ会をする日でした。

子どもたちは建物に感謝、そして公民館を貸すことを快諾してくださった町長さんにも心から感謝していました。新しい園舎での生活は1からのスタートですが全員の力を合わせて頑張ってもらいたいです。

3日目は仮設住宅に行かせていただきま

した。そこに住むたくさんの方が震災で様々な大切なもの、人をなくしています。しかし全員が笑顔を絶やさずに未来に向かって生活をより良くしていこうとしていました。震災を忘れてはならない、これは当たり前のことですが未来を見据えて行動を起こすことも大切だということを仮設住宅のみなさんは教えてくれました。

4日目は教会に行き地元の方と一っしょに礼拝に参加しました。最終日だったのでボランティアを通して自分がなにを学べたか、いろいろな方からお話ししていただいたことをちゃんと理解しボランティアに参加する前の自分より成長できたかを心を落ち着かせて考えることができました。

名古屋に帰ってきて自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の心で思ったことを周りの人に伝えるのは簡単ではないと思いますが、被災地の今とこれからを伝えていけたらいいなと思います。



私が、この4日間を通して心に残っていることは3日目の「いっしょに歩こう!プロジェクト」の方とこの3月11日の地震を体験なされた荒みよ子さんのお話を伺ったり、実際に現場まで行って被災地を間近で見たことです。

「いっしょに歩こう!プロジェクト」の方と荒みよさんと一緒に津波の被害を受けた海岸沿いの住宅街や磯山ヨハネ教会などをみにいきました。家は土台だけ堤防はボロボロに破壊されていて標識の棒も曲がりアスファルトがめくりあがっていました。テレビとは違い生々しく、本当に悲惨で言葉になりませんでした。みよさんは、「ここに私の家があったのよ。」とおっしゃった時今まで笑顔で話されていたのに顔つきが変わりました。やはり、3月11日の2時46分のこと思い出されるようで、この地震や津波を体験された人々の心の傷はとても深いのだと改めてかんがえられました。

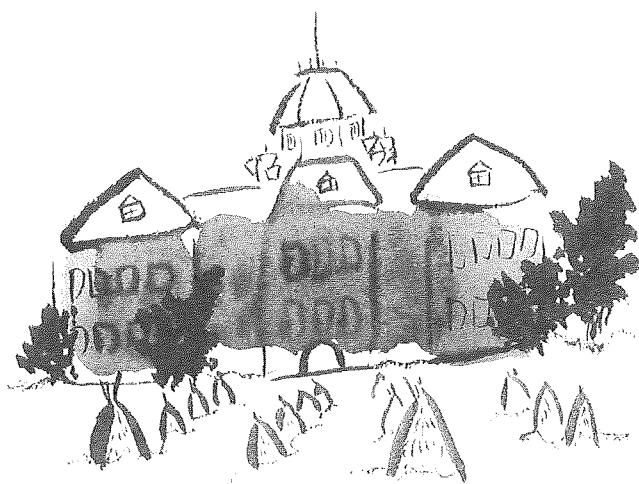
訪問のあと、仮設住宅にもお邪魔させていただき、喋りながら一緒におしゃべりしていました。子ども達も元気ですごく笑って話したり遊んだりしていましたが地震の話になると顔つきが変わりすごい辛そうな顔をするときがありました。それを見ていると私自身も辛くなり泣きそうになりました。1時間も滞在できなかったけれども仮

設住宅の方々はずごく暖かく、元気でもっともっと一緒に過ごしていたかったです。そして、もう一つ心に残ったのが若松幼稚園の園長先生のおはなしです。その中の1つに“援助”の話がありました。それは、園長先生が地方に車で買い物に出かけた時の事、駐車場に車を止め買い物から帰ってくると自分の車の周りに車が1台も止まっていなかったことがあったそうです。でもその避けて車を止めた人たちは、募金をして援助をしてくれている。そんな援助の仕方もあるれば、黙って車のミラーにジュースなどをかけといてくれる援助の仕方。園長先生は再創造にはお金は必要だが、そのような心のこもった援助は本当に心の支えになるとおっしゃられていました。原発問題で偏見を持つことはあるかもしれないけれど被災者の方々はずごくつらい思いをされ必至に戦っていることを絶対に忘れてはいけないと感じた。

徐々に工事が進められ、草などの植物が生えてきてきれいになっていっても絶対これからもこの3月11日2時46分の出来事は忘れてはいけない。心の傷を負っている人はたくさんいる。そのことを考え、今平凡に暮らせていることに感謝してこれからの生活過ごして行こうと思いました。このボランティアを通してたくさんの人に出会

い体験できたたくさんの人々に感謝の気持ち  
でいっぱいです。

この経験を通して学んだことをこれで終  
わらせないためこれからも活動して少しで  
も被災地の方々の力になりたいです。





『東日本大震災』が起きてから、1年半が経とうとしているときに、私たちは仙台へ復興支援ボランティアに行ってきました。新幹線を乗り継ぎ、3時間半。到着した仙台駅から街を見て、「本当にここが、地震や津波が起きた場所なのかなあ。」と疑問に思うほど人々は普通に生活をしている風に見えました。しかし、3泊4日を仙台で過ごして、今まで知らなかったことを知ることができ、たくさん考えさせられることができました。

【いっしょに歩こう!プロジェクト】では、活動の映像を見させていただき、話を聞きました。支援される側・する側と一緒に歩いていこうという意味がこもっているそうです。『がれきは人のものだった。』という言葉には衝撃を受けました。津波に流された跡地に残っている瓦礫は、そこに暮らしていた人たちのそれぞれの思いがあります。ただの瓦礫ではないということです。

【ふじ幼稚園】は、仮園舎最終日だったので『ありがとうの会』に参加して、自由時間では子どもたちと汗だくになりながら遊び、引っ越しのお手伝いも少ししました。旧園舎・新園舎も見させていただきました。旧園舎は、津波がこの高さまできたのだ。ということが一目でわかるくらいに、はつきりと壁に線が入っていました。ふじ幼稚

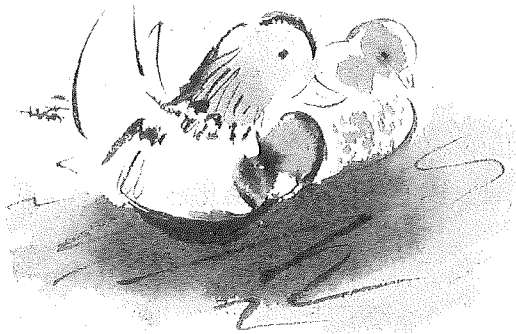
園であった出来事を聞いてはいたけれど、子どもたちは想像以上に明るくて人懐っこかったです。先生・子どもたちを見て、素敵な幼稚園だと思いました。

【新地ベース】被災した新地町に行き、話を聞きながら実際に新地を歩きました。仙台駅周辺とは違い、私たちが今までテレビで見ていたままの光景でした。しかし、実際自分の足で歩くことにより現状を知ることができました。

このほかにも【まちの工房まどかへの訪問】【仮設住宅訪問】【主日礼拝参加】をしました。どれも印象に残っていて、書ききれないくらいの充実した4日間を過ごしました。

2011年3月11日、14時46分18秒。たくさんの人たちの人生を変えてしまう出来事だったと思います。家族や友人、自分の育った思い出の場所や学校などを失ってしまった人たち。それでも前を見て、一生懸命に生きている人たちがいるのを知り「私も頑張らなければ!」と元気をもらいました。ボランティアで出会った人たちに『ありがとう』と歓迎してもらえたことがすごく嬉しかったです。子どもたちには『また遊ぼうね、また来てね。』と言ってもらえたこと。たくさんのがれきが思い出として残っています。ボランティアを終えて、保育

者を目指している私には何ができるのか。  
何をしなければならないのか。保育者にな  
った時にどう生かすことができるのか。考  
えたことを行動にうつして行くことはでき  
ると思います。1日1分1秒大切にしてい  
こうと思います。私たちの訪問に関わっ  
てくださった人や、引率の先生方、ともにボ  
ランティアに参加した先輩・仲間には、た  
くさんお世話になりました。ありがとうご  
ざいます。



私は3泊4日間、＜日本聖公会東日本大震災被災者支援 いっしょに歩こう!プロジェクト＞に参加させて頂くことで普段経験出来ない様々なことを経験してきました。

1 日目は＜町の工房まどか＞へ行き、津波で建物全てを失ってから再建までの話をお聞きしました。津波が襲った時、障がいを持つ利用者を安全な場所に避難させるために職員が全力で避難させ、被災した4日後には職員会をして翌日には自主再建という素早い判断力と再建に向けての力強さを感じました。悲しみの中でも明日のことを考え過ごすことで周りの人々が支援してくれることに繋がるという言葉聞き、支援者も＜町の工房まどか＞の前向きな気持ちがあったからこそ様々な支援や協力のもとで再建が進んだのだと思いました。また、再建に向けてニュースや新聞で多く取り上げられることにより支援者が増加することを知りました。私自身も東日本大震災のできごとや被災者の声などを忘れることなく多くの人に伝えていきたいです。

2 日目は、ふじ幼稚園へボランティアに行きました。ふじ幼稚園の津波で被災した園舎を見た時には言葉が出ませんでした。津波の恐ろしさを感じました。壁一面に浸水した痕が一年経ってもはっきりと残っていました。私がふじ幼稚園へ行った日が仮

の園舎で過ごす最後の日で、とても貴重な時間を共有させて頂きました。ありがとうの会では、保育者がパネルシアターを演じて子どもが夢中になってみている姿が多く見られました。保育者が子どもたちに向けての感謝を保育や言葉で伝え、子どもたちが感謝の気持ちを歌、メッセージボード、言葉にして伝えている姿をみて温かい気持ちになりました。保育者の保育を見てどんなに辛いことも思い返すことや言葉にすることで子どもの心も前向きになっていくのだと感じました。

子どもと昼食を食べてから、子どもの前で手遊び、絵本、表現遊びをしました。表現遊びでは、子どもたちをひまわりの種に見立てて水をあげ元気で力強いひまわりのようになってほしいという思いをこめて保育をしました。子どもたちが元気いっぱいひまわりになりきっている姿をみて私のほうが元気をもらいました。

私もふじ幼稚園の保育者のように子どもが悲しさや辛さを経験した時に受け止め、共感し心を楽にしてあげること、一緒に思い返し乗り越えていける強さを与えてあげることなど様々な保育がタイミング良く展開できる保育者になりたいと思いました。

3 日目は仮設住宅へ行き、支援について学びました。支援には三段階あり、必要な

支援を行うためには被災者に直接話を聴きニーズに応じていかなければならないと感じました。保育をするなかでも一人ひとり子どもを中心にその子どもを取り巻く全ての環境を知ったうえで適切な支援をすることができるようになりたいと思いました。また、亡くなってしまった人々の中には助けられた命もあったように感じました。津波を知らせる言葉も日本語だけではなく英語や母国語が一度でもあったら日本に住む外国人の命が救われたと思いました。きっと被災した人のほうが様々なことを感じ、考え、悩んだのではないかと思います、また同じようなことが起きた時により多くの方が生きていられるようにまだまだ支援の必要性を感じました。

4 日目は、主日礼拝に参加させて頂きました。家族を亡くした人が礼拝を通して心の休まる場所となっているのではないかと感じました。練習した聖歌を、先生と学生とが合唱し主日礼拝を経験することができてよかったです。

私も保育者になった時に歌や静かに心を休ませる時間子どもたちに伝え経験させることができるように生かしていけたら良いと思います。

今回の東日本大震災復興支援ボランティアで経験し感じたことを保育に取り入れ実践することが出来るように努力していきたいです。一人ひとりの子どもを知った上

でその子どもの気持ちに寄り添うことで子どもの個性や心身の発達を促す保育が出来ると思いました。また、保育をするなかで最も大切なことは子どもの命を守ることだと思いました。子どもの命を守るためにも日頃から万が一のことを想定し指導案を書いておくこと、園全体で訓練や把握を統一しておかなければならないと思います。子どもの今と未来を精一杯考え、保育をする中で子どもと保護者に安心感を与えられる存在で有りたいです。



「復興ではなく、再創造である」今回ボランティアに参加し、私は初めてこの言葉を知った。今まであったままに戻すのではなく、自分たちの土地を自分たちで耕し、自分たちの生きる糧を養う、それが再創造。そのために私たちは、再創造されていく支援法をしていかななくてはならないと感じた。

3. 11 から 1 年半が経過した今、私たちにできることは何か。それを知り、実行することが今回のボランティアに参加する中で私の課題であった。そのために、現地に行かなくてはわからないようなメディアが取り上げていない現状に目を向けることに力を入れた。

仙台市内や町中では、いつも交通渋滞が起こっていた。それは、地盤沈下などによりあちらこちらで道路工事を行っていたからである。私たちが、少しずつ募金していた支援金はどのように使われているのだろう、このように人々の生活をしやすくする身近なところにいち早く使われるべきではないのだろうかと感じた。海岸沿いに近づくにつれて、辺りは瓦礫の山や震災当時のままの崩れかけた建物ばかり。道路や JR の線路は寸断されたまま。震災から 1 年半経過した今でもまだまだ再創造されていない現状だった。

活動 2 日目に福島県会津若松市にある若

松聖愛幼稚園を訪問した。100 年以上使っていた園舎は、震災の影響で倒壊の危険があると判定され、建て直しのために現在は公民館を借り、保育を行っていた。震災を受け、放射線の問題に直面し、このまま保育を行うのか、閉園するのかというときの心境を、園長先生は涙ながらに語ってくださった。震災後、放射線の問題などにより幼稚園に通う子どもが激減したそうだ。それにより、どの園も保育料を安くするなどさまざまな対策をする中で子どもの取り合いが起きてしまった。園長先生は、子どもたちの傷を癒したい、また、人を集めたい、そう考え閉園しないと決めたそうだ。そのときに、さまざまな人が協力し資金援助や“いっしょに歩こう!プロジェクト”が支援をし、新園舎を建てることができるようになったそうだ。幼稚園の存続のために、保護者が安心して子どもを預けられるよう、先生方は毎日のように除染作業を行っていたそうだ。そして子どもたちの裸足保育はやめ、今でも泥遊びは行っていなかった。先生方は、私たちに保育者としての心構えを教えてくださいました。命をかけて子どもたちを守ること、また子どもたち一人ひとりに目を向け今一番何が必要なのか考えること、グローバルな視点に立つために、報道されないところに目を向けて、常にアンテ



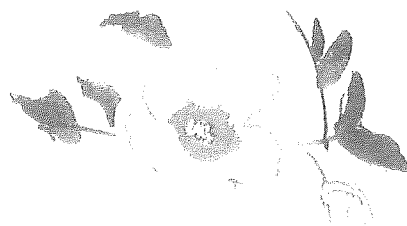
ナを張っておかなくてはならないと思った。被災して以来、水に恐怖心を抱いている子や夜になると震災の夢見て泣き出す子が多いそうだ。そのような子どもたちに対して先生方は「先生たちが守ってあげるから絶対に大丈夫!」と子どもたちの精神の安定をはかっていらっしやった。時には子どもたちが「先生は僕たちが守る!」と、しっかりした一面も見せるようだ。子どもたちの傷ついた心を癒すだけでなく精神的な成長を促すことも保育者にとって必要なことだと学んだ。また、子どもたちは「愛知のお姉さんたちに会えたこと、絶対に忘れないよ。」と言ってくれた。ひとつひとつの出会いや関わりを大切にしなければならぬと子どもたちから学んだ。またこの子どもたちに会いたいと強く思った。

活動している中で、震災が起きた時刻「2:46」で止まっている壁掛けの時計をいくつも見た。現地の人に、なぜ震災が起きた時刻で止まっている時計を掛けたままにしているのか訪ねた。「東日本大震災の出来事を忘れないために」。私は、当時のことを思い出すのは辛く悲しいものだと思っていたが、それよりもその出来事が人々の記憶から消えて行ってしまうことの方が辛いのだと分かった。これは、当事者でなくはわからない感覚だと思う。

私が今回このボランティアに参加し、ここに書ききれないくらい沢山のことを学び、

肌で感じることができた。この経験を多くの人にもしてもらいたいと思う。そして、誰もが東日本大震災の出来事を忘れてしまわないようにしなければならない。そのために、私ができることは、ボランティアで学んだこと感じたこと、報道されない現状をより多くの人に伝えることだと思う。3.11から1年半が経過した今は、緊急支援活動・復興支援活動・自立支援活動の3段階の中の復興支援活動にあたる。それは、現地の声を聞き、ニーズに応えた支援をすることが求められる。被災地は、ようやく工事や今後の見通しが立てられ今から大きく動き出すというところ。もし私たちが今後、東海・東南海地震などで被災したときには一人でも多くの命を救うためにここでの経験を生かした行動をしなくてはならない。そのためには、まず、私たちが東日本大震災の被災地の現状を知らなくてはならないと感じた。

今後もこのつながりを大切に、再創造されていく支援を続けていきたい。



仙台駅に着いたとき、本当にここは被災地なのかととても信じられませんでした。津波にあった場所も、震災にあった場所も夏草が生え、ガレキも片づけられていました。私たちにとっては、ガレキの山に見える姿も、被災者にとっては1つ1つが思い出の山であると思うと心が痛んだ。現地の方に「ここは津波に遭う前は、住宅街だったんだよ。」と教えていただかなければ、分からないぐらいでした。しかし、三日目に新地町の海岸に行ったとき、津波の恐ろしさを目の当たりにしました。そこには土台だけしかない家、遠くから流れてきた道、グニャグニャに折れ曲がった柵など想像を絶するものばかりでした。テレビで津波の映像を見て知っていたはずでしたが、実際に見たものとは異なるもので、その姿に圧倒されるばかりでした。

二日目に、会津若松にある若松聖愛幼稚園で、子ども達と関わる機会がありました。聖愛幼稚園は震災の影響を受けたため、今はザベリオ学園を間借りして、仮園舎で保育をしている様子が伺えました。礼拝から参加させていただき、その後、柳城生の時間を設けてくださいました。礼拝では、どの子どもも静かに手を胸の前で合わせている姿が見られ、心の落ち着きを感じました。礼拝後、「ドロップスのうた」をブラックパネ

ルシアターで行うと、夢中でブラックパネルシアターを見ている子ども達の姿が見られました。さらに、フレーベルの恩物を使ったマリ隠しでは、友だちと相談しながらマリを探す姿・隠す姿、我慢できなくてマリの場所を教えてしまう姿など、どの子どもも楽しんで取り組んでいる姿が見られました。そんな子どもたちと関わっていくうちに、どのように子ども達と接したらいいのかという不安はなくなっていました。震災があつて辛いはずなのに、それを感じさせないとびっきりの笑顔で迎えてくれたので、私たちのほうが元気をもらいました。

園長先生のエピソードで私自身とても考えさせられたことがあります。園長先生は涙ながらに話してくださいました。『仙台から県外にお買い物に行ったときに、車を止めておいたらその周りだけ避けるように車が止まってなかったんです。でもその中で、仙台ナンバーの車にサッとブルーシートを被せてくれた方がみえたんです。私はその光景を見て、義援金を出しているけど仙台ナンバーの車を避けていく人がいるのはとても残念です。その中でブルーシートを黙って被せるような行動を起こすことが、本当の絆を深めることになるのではないのでしょうか。』というお話を聞いて、本当の意味での被災者の支援とはなにかということ

考えさせられました。

ミヨ子さんの津波に遭った時のお話は、  
私たちがテレビで目にしただけでは知るこ  
とのできないことばかりでした。『津波が来  
るから逃げて！』という放送は一部の場所  
にしか聞こえず、放送を聞いていた人から  
『津波が来たぞ！逃げろ！』と言われて逃  
げた人が多かったそうです。ミヨ子さんも  
周りの人に言われて、急いで高台まで避難  
し、そのとき津波は大きい塊に見えたそう  
です。そのときの様子を、土台だけ残った  
家、グニャグニャになった海岸の柵が物語  
っているようでした。

私はこの四日間で被災した方たちのため  
に何ができたのだろう・・・と帰ってきてか  
らもそのことが頭から離れませんでした。  
『今回の震災のことを忘れないでほしい。  
なかったことにされるのが、一番辛い』と  
どの方も言っていたのを思い出しました。  
被災地では何もできなかったのかもしれま  
せん。ですが、被災地で私たちが見たり、  
聞いたりしたことを伝えることで、テレビ  
では取り上げられていない所でも大きな被  
害を受けていること、支援がまだまだ必要  
だということを多くの人に知ってほしいで  
す。そのためには、今回起こった震災のこ  
とが多くの人々の心にいつまでも残るように、  
働きかけていくことが私たちの役目だと思  
います。『いっしょに歩こうプロジェクト』  
は終わりになりますが、今回とは違う形で

被災地に行ったり、今回訪問した幼稚園や  
仮設住宅の方と手紙などを通して、繋がり  
を絶やさないようにしていきたいです。



今回、私が東北震災ボランティアに参加しようと思った理由は、ただ被災地に行ってみたいという理由でした。

東北に行くまでは、被災地の状況をテレビやネットなどのメディアでしか知ることが出来なくて、どのように今、復興支援されているのかとても不安でした。復興支援はかなり進んでいると私は思っていました。しかし実際に東北に行ってみるとテレビやネットの写真や映像では見られない真実がありました。1年半たった今でも、復興されていない街、家族が見つかってない人たち、見るすべてのものが衝撃的でした。

東北の人たちとどのように接してよいのかとても悩みました。私が体験したことのない出来事を東北の人たちはしている。それがどれだけ辛いことなのかわかっているけどどのような言葉をかけていいのか悩みました。気を使ってはいけない。この人たちは東北の人だって思っただけでいいって気づいたのは幼稚園に行った時でした。怖い思いをしたはずの園児たちはとても笑顔で園生活を送っていました。私たちが考えているより子どもたちはとても強かったです。緊張していた私を笑顔にしてくれたのも子どもたちでした。楽しくみんなとご飯を食べる姿や仲良く外で遊ぶ姿はとても可愛らしかったです。子どもたちと関わるな

かで私たちも自然と笑顔になることができました。緊張して関わるのが不安だったけど子どもたちと別れるのはとても寂しかったです。たったの半日しか子どもたちと関わるができなかったけど、一緒に楽しく遊ぶことができるととても良い体験ができました。

東北震災ボランティアに参加してとてもいろいろな体験をすることが出来ましたし、真実を知ることが出来ました。実際に被災地に行き津波の怖さを改めて感じました。恐ろしい津波を体験した人もいる、またその津波のせいで亡くなった方もいます。メディアだけでは知ることの出来ない被災地の方の生の声を聞くことが出来て本当に良かったです。

東北震災ボランティアに参加したことでどれだけあたりまの生活をするのが幸せなのか実感することが出来ました。私たちは当たり前前に普通の生活が出来ていて家族がいて、帰る場所もあります。これがどれだけ幸せなのか感じさせられました。何年、何十年後に東北にもあたりまえの日常がまた戻ってくることを願っています。そして今回、東北で関わった方々が幸せになれることを願っています。ボランティアを通して自分自身見直すことが出来たと思います。ボランティアでの体験を今後とも

心に残していきたいと思います。東日本大震災ボランティアに参加出来ていろいろなことが体験できて本当に良かったと私は思っています。





## あとがきにかえて

8月30日から9月2日までの4日間にわたり、名古屋柳城短期大学保育科2年生4名、1年生9名、引率教員4名、元チャプレン下原司祭の計18名が「いっしょに歩こうプロジェクト!」の協力のもと、東日本大震災復興支援ボランティアに参加した。

訪問先は、「まちの工房まどか」、「若松聖愛幼稚園」、「ふじ幼稚園」、「新地ベース」、「広畑仮設住宅」、「磯山聖ヨハネ教会」と「(斎藤邸)での聖餐式」であった。仙台駅に降り立った我々の率直な思いは、本当に被災地なのだろうかと目を疑った。しかし、仙台市中心部から太平洋沿岸に向かうにつれ、町並みは一変し、空洞になった家々、そして今や野草に覆われた風景が見受けられ言葉を失った。それぞれの施設に訪問し、施設長や園長先生、松本氏のお話を聞き、さらに、施設利用者や園児、仮設住宅に住んでいる人々と出会い共通していたことは、笑顔と心から我々を受け入れてくれた点である。その姿を見たとき、私は、町並みを覆い尽くす野花を思い出した。野花は、何もない状態から芽をだし、成長し、そして花を咲かせる。また、そこから美しさや香りを放つ。その姿はまるで、被災者の生きる力を反映しているかのようであった。マタイの福音書6章29節に「しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」とある。ありのままを受け入れ、毎日を精一杯生き、自然体で生きているからこそ野花は豪華に着飾った王様よりも美しいとイエス・キリストは語っている。

また、マタイの福音書6章34節に「だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」とある。これらのことから目の前の課題と仕事に、全力で取り組む被災地の方々と触れ合うことで、本学の学生も様々なことを心の中で感じ、また、自分を見つめなおすことができ、よい体験をさせていただいた。

最後に、この地震で亡くなった方々のご冥福をお祈りします。また、家族、友人、知人などを失った方々にお悔やみを申し上げます。早く被災地が復興し、人々に明るい笑顔が戻ってほしい。

この場をかりて、ボランティア活動を行うにあたり、協力してくださった「いっしょに歩こうプロジェクト!」の方々、また、支えてくださった本学の教職員の皆様に感謝申し上げます。

宗教委員：水落洋志

発行日 2013年2月4日  
編集 名古屋柳城短期大学 キリスト教センター (宗教委員会)  
発行 名古屋柳城短期大学  
〒466-0034  
名古屋市昭和区明月町2-54  
TEL 052-841-2635 (代)  
FAX 052-841-2697  
印刷 株式会社 一誠社

